

2022年横浜ナザレン教会・復活後第二主日(5/1)礼拝

「教会が持っているもの」

使徒言行録第三章 1 節から 10 節

【聖書】

使徒言行録 3:1 ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。2 すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。3 彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。4 ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。5 その男が、何かもらえんと思つて二人を見つめていると、6 ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」7 そして、右手を取つて彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、8 躍り上がつて立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入つて行った。9 民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。10 彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座つて施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こつたことに我を忘れるほど驚いた。

1. 教会が持っているもの

先週の礼拝の後、私たちは2022年度の教会総会を持ちました。そこで、具体的数字をあげて話しましたが、横浜ナザレン教会は今、教会存亡の危機を迎えています。しかし、神は必ず助けてくださる、という確信が与えられました。何故なら、今朝の礼拝でも、今の私達に、最もふさわしい聖書のみ言葉が与えられたからです。生まれたばかりの教会が最初に行つた救いの物語。ここには、天の御神から教会に確かに与えられたもの、そして、教会がこの世に与えるようにと命じられているものが、描かれています。

2. 神殿と足の不自由な男

教会にとって初めての救いの業は、午後三時の祈りのために、ペトロとヨハネが神殿を訪れた事から始まります。この時のエルサレム神殿は、真の信仰の場とは言えませんでした。長い神と神の民の歳月の中、神殿祭司たち、長老たち、律法学者たちなど、偉い人達、支配者たちは、真の神への恐れを忘れて昂ぶり、自分達に都合のよい、自分達が扱いやすい神を造り上げて、神との関係をすっかり捻じ曲げていました。多くの人々も、それに従っていたのです。主イエスは、エルサレムに入られてすぐ、エルサレム神殿の境内で商売をしていた人々を追い出し、『「私の家は、祈りの家となる。」ところが、あなたがたはそれを強盗の巢にした。』と仰いました。自分達の本当の姿を言い当てられた祭司長達は、悔い改めると

ころか、この主の言葉を機に、主を殺す計画を立て、実際に逮捕して十字架に架けて殺してしまいます。

しかし、これは、イエス様の時代のユダヤ教の指導者達だけが陥った罪ではありません。私達にも言える事です。真の神への恐れを忘れ、自分達に都合のよい神を求め造り上げ、これを礼拝する時、神殿も教会も生ける神の働かれる場所ではなく、真の神を殺す陰謀が巡らされる場所となる事を私たちも忘れてはいけないのだと思います。

さて、エルサレム神殿には、誰でも入れる「異邦人の庭」と、ユダヤ人しか入れない「婦人たちの庭」と呼ばれる庭がありました。その二つの庭を分ける壁に設けられた門は、金や銅を贅沢に使った異国情緒あふれる凝ったデザインだったようで、人々は「美しい門」と人々が呼んでいたようです。そこには、神殿への参拝者に物乞いをして生活している足の不自由な男がいました。第四章22節には、「この男は四十歳を過ぎていた」とあります。彼は、生まれてから四十年以上、歩くどころか立ち上がることもできない、丸太のように地面に縛り付けられて過ごしてきました。ある神学者は、その姿をこう言っています。「彼はまるで、私たち誰にでも必ずやって来る死を先取りして生きているようだ」。

「死を先取りして生きている」、この男の不自由さを表す言葉に、自分自身のことを思い出しました。私事で恐縮ですが、私もまた四十歳になるまで、神というものを全く知らず、神を礼拝する事なく生きていました。自分の意思で自由に生きているつもりでしたが、今から考えれば、息が詰まる程に不自由でした。人は優秀でならなきやいけない、優しくならねばいけない…色んな「〇〇であるべき」にがんじがらめとなっていました。無意識のうちに「自分は〇〇でなければ生きる価値がない」と考えていたのです。しかし、自分の思うように生きる事が出来ずにいました。様々な気晴らしをしましたが、どれも一時的。いつもどこかで惨めな想いを抱いていました。やがてやって来る死を先取りして生きるような命であった、と思います。今から思うと分かるのですが、当時の私の魂は、そうとは気づかぬうちに「神はどこにおられるのか」と叫んでいました。しかし、どうしてよいのか分からない、神へのまっすぐな道がわからず、曲がりくねった道に迷い込んでいました。

これは私だけではないと思うのです。「死を先取りするような不自由な命に生きている」、現代を生きる私達に、多かれ少なかれ言えることではないでしょうか。何故なら、私たちの根本には、真の神を神とするよりも、自分が神のようにになりたい、というアダムとエバに始まる罪があるから。私達は、神との関係が歪んでおり、神を知ることができず、神以外のものに囚われている不自由さをもって生きざるを得ない。この男は、神を知らず罪に縛られた不自由な私たちのようです。

### 3. 教会

この不自由な男のもとに、聖霊なる御神を注がれたペトロとヨハネがやって来ました。彼らは、聖霊の力、主イエス・キリストの甦りの命の力に満たされており、イエス・キリストを語る言葉、神の言葉を与えられていた二人でした。神の言葉が、足が不自由な男のもとへとやって

来たのです。

そのペトロとヨハネに、男は施しを乞います。私達人間には、真実に自分に必要なものがわからない時が多くあります。この男も分かりませんでした。自分に必要なものは、施しとして与えられる金銭だ、と考えていました。ですが、聖霊なる御神は、彼が本当に必要としているものをご存じでした。

さて、施しを乞うた男をペトロとヨハネは見つめます。聖霊なる御神が、主イエス・キリストがこの男を見たのです。だからこそ、ペトロとヨハネは、「私達を見なさい」と彼に話しかけたのでしょ。彼らは、この男を、神殿に沢山いる物乞いの一人、大勢のうちの人ではなく、かけがえのない存在として受けとめたからです。それは、ナザレの人・主イエスが、この地上で出会った人々に対して行ったことだからです。

足の不自由な男は、「この男たちの身なりは貧しいが、一体何をくれるのだろうか」と期待して二人を見返します。が、彼のこの施しへの淡い期待をペトロの次の言葉が打ち砕きます。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。」ペトロは、この時、自分で語る言葉を自分で聞いて、驚いていたのではないかと、思います。こんな言葉は自分の中にはない！と。ペトロの内に満ちてくださる聖霊なる御神が、彼を通して主イエス・キリストの言葉を語らせてくださいました。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。」

これこそ、神が生きて働いておられる教会の言葉です。教会には金や銀はありません。金や銀では人を救うことはできないからです。確かに、金や銀の「施し」は、彼の空腹を満たすでしょう、しかし、金や銀の施しは、使えばなくなり、そして腹は又、減るのです。彼は、再び、ここに運んできてもらい、うずくまり、まるで存在しない者のように彼を無視し通り過ぎる人々に、施しを乞い続けるしかありません。そうした施しは、果たして彼を本当に救うでしょうか、彼を変えるのでしょうか。この男に本当に自由にするのでしょうか。いや、救いはしないのです。却って、金や銀を渴望し、それに頼る気持ちを起こさせるだけ。やがて死ぬ命を生きる事には変わりはありません。神は、教会に、そのような一時しのぎのものを与えてはられません。

#### 4. ナザレの人イエス・キリストの名

では、教会が持っているもの、そして、この男を始め罪に縛られて不自由に生きる全ての人々に与えることができるものは、なんでしょうか。

それは、「ナザレの人イエス・キリストの名」だと聖書は語ります。「ナザレの人イエス・キリストの名」とは、イエス・キリストご自身を示します。真の神である神の独り子が、真の人間としてナザレ人イエスとなり、ペトロはじめ弟子たちとこの世を歩まれました。神を神とできない、神との関係が曲がっている人々と出会い、一人一人をかけがえのない存在として受け止めてくださる父なるみ神が、今も生きて働いておられる事を力強い言葉と行いで示してくださいました。そして、罪びとの手に渡され、しかし、実際は、ご自身を殺す人間を赦して救うために、神を殺し自分達が神となろうとする人間の罪を償うために、十字架に苦しみ死んで葬

られたのです。このお方を父なる御神は、三日目に永遠の命へと甦らされました。だから、この「ナザレの人イエス・キリストの名」には、永遠の命へと主イエスを甦らせた力が満ちているのです。

死から命を生み出す力、審いて罪との関係を断ち切り、赦して解き放つ力、滅びの絶望の中に希望を輝かせ、孤独の中に愛を交わりをもたらし、儂さの中に永遠を生み出す神のみ力です。人間が考える事も思い浮かべる事もできないような、今までにない状況を産み出す力、それが教会に与えられた聖霊なる御神の御力、「ナザレの人イエス・キリストの名」です。教会は、この名を呼び求める者達の群れであり、呼び求めてこのお方を与えられている群れです。第2章 21 節に「主の名を呼び求める者は救われる」とある通りです。

だから、教会は、ペトロは、足の不自由な男に命じます。「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」今、ここで鳴り響くのは、一つの命令です。しかし、なんとも矛盾に満ちた、人間が本気で命ずる事ができない命令です。何故なら、ペトロは、この男ができない事をしなさい、と命じているのですから。この男の不幸は、他でもありません、「なんとかして歩きたい、と胸をかきむしられるほどに望むのに、どうしても歩けない」ことです。そうであるのに、ペトロを通じて、聖霊なる御神は呼びかけるのです。「まさにあなたにできないこと、立ち上がって歩くこと、そのことを、しなさい！」

それはまるで、次のように言っているようです。「『自分ではできない』ということに囚われずに、敢えてやってみなさい。ただ、ナザレの人イエス・キリストにだけより頼み、そのお名前を呼び求めつつ、その御力にすがるようにして縋り、立ち上がりなさい。あなたは、今、立ち上がり歩くことが、天の御神によって許されている。だから、あなたは、今こそ、立ち上がり歩くことができる」。

「出来ない、という事に構わず捕らわれずに、キリスト・イエスの力によって、立ち上がり歩きなさい」この不思議な命令こそ、不自由な男の命の内へと入りこみ、神の御力にのみ頼って生きる神の子の自由へと、力強く立ち上がらせる言葉でありました。この命令こそ、なんとも不思議な神のみ業であり、奇跡であり、神のみ言葉が、イエス・キリストのみ名の力によって彼の上に起こした慈しみの御業です。

そして、7節、ペトロが右手を取って彼を立ち上がらせた、とあるところに、まことの教会が姿を現しています。男は一人で立ち上がったのではなく、イエス・キリストのみ名に、永遠の命の力に共に生かされる仲間の助けを借りて、共に立ち上がったのです。そして、ヨハネは、これをまじかに見て、この出来事の証人となります。ペトロとヨハネは、この男を助けているようですが、彼らもまたイエス・キリストの永遠の命の力に与っているのです。そうして、ペトロとヨハネは、共にイエス・キリストの永遠の命の力を証をすべく、神様に用いられました。これこそ、第二章42節にある「相互の交わり」コイノニアではないでしょうか。

「すると、たちまちその男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立、歩き出した。そして、歩き回ったり、躍りまわったりして神を賛美した。」彼は、四十年間死人のように生きていた男です。あるがままの人間として、足の不自由な体のままで、突然、癒しの力に捉えら

れ取り巻かれ持ち上げられ、支えられ、立ち上がり歩き回ることができました！彼はもはや死の陰の中で生き続けてはいません。それどころか、永遠の生命の光の中を歩いているのです。まるで別の男です。今、十字架と復活の主イエス・キリストは、その永遠の命の力をもって、男そのものを造り変えたからです。この男にとっては不可能なことを命じる命令に彼が答え立ち上がろうとした時、彼は造り変えられました。神の御前に立ち上がる力、永遠の命の力を与えられたのです。彼が、今こそ新たに始まった生命に満ち溢れて「躍びはねた」としても何の不思議もありません。彼は、キリスト・イエスの内に高く高くジャンプし、自分自身の上に現れた神の永遠の命の力を「ハレルヤ！」と賛美しています。

「そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。」彼は、ペトロとヨハネに、聖霊なる御神を与えられている者達の仲間に、加えられました。第二章47節に、「主は救われる人々を日々、仲間に加えられていった」とある通りです。この男の上に起こった事は、私たち一人一人の上に起こったこと、起こっていること、そして、今からも起こることです。

#### 5. 私達の物語、横浜ナザレン教会の物語

今日の話は、どこの教会の話でしょうか。私たちの教会、横浜ナザレン教会です。私たちは皆、ナザレの人イエス・キリストの名によって、死を生きる不自由な命から神の子の自由へと解放され続ける者であり、お互いに右手をとって立ち上がらせ合い、お互いにそのことを証しあう仲間です。そうして、躍り上がる喜びのうちに、神を賛美し、この世を救うイエス・キリストの名を宣べ伝えていくように、横浜市西区霞ヶ丘に建てられたキリストの体です。

先週の教会総会で私達は、横浜ナザレン教会が危機的状況にある事を改めて確認しました。しかし、危機にある今こそ、神にのみより頼み、主イエスに倣ってこの世を愛し、神の愛を証する伝道活動をするよいチャンスです。今こそ、「私達にはとても出来ない」と私達が思い込んでいる事を、イエス・キリストの名により頼んで行う時。立ち上がって歩きなさい、神の子の自由で歩き回り、その世界を愛しなさい、あなた達は既に、それができるように変えられています、と、今日の物語は、私達に呼び掛けているようです。

儂く滅ぼるもの、過ぎ去っていく「施し」を追い求めて不自由に生き、塵のように消えるしかなかった私達に十字架と復活の主、イエス・キリストを通して、永遠の命の力に生かしてください、「この喜びを世に伝えよ」と命じてくださる父なる御神を賛美し、心からの感謝をささげます。